「こども食堂」とは？
二〇一二年、東京都大田区で、「食へのこだわりを通じて地域コミュニティを広げる」というコンセプトの「気まぐれ八百屋だんだん」を営んでいる近藤博子さんが、満足に食事が摂れない子どもがいるという現実を知り、子どもが一人でも入れて、ほぼ無料で食事ができる居場所を作り、「こども食堂」と命名したことから始まっています。
近藤さんは地域で生活している身近な子どもの現実を出発点にこども食堂を始めたのであって、最初から大上段に構えて「子どもの貧困」という社会問題に取り組もうとしたわけではありません。しかし、二〇一三年には「子どもの貧困対策法」が成立し、この問題への世間の関心が高まっていく中、私たち、地域で暮らす普通のおじちゃん、おばちゃんにも何かできることはないのか・・・という問いへの答えとして、こども食堂が注目されるようになりました。
二〇一四年、ＮＨＫの人気番組「あさイチ」に「豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク」の栗林知絵子さんが出演したことで、「こども食堂が子どもの貧困問題を解決する切り札になるのではないか」、「自分にもできるのではないか」という機運が一気に高まりました。
栗林知絵子さんは全国に広がる「こども食堂ネットワーク」の産みの親です。
栗林さんの講演を聞いて自分もこども食堂を立ち上げたという人が全国各地に、今も増殖中です。かく言う私も、その一人です。

レインボーリボンは PTA で知り合ったお母さんたちで作った小さな NPO 法人です。
子ども食堂ブームに火が点いた頃、二〇一六年から地元、東京都葛飾区で子ども食堂を始めました。今は三カ所でこども食堂を運営しています。

こども食堂運営者の悩みとして、「“来てほしい” 家庭の子どもや親に来てもらえない」という声をよく聞きます。貧困問題に心を痛めて始めた事業でも、「貧困の子どものための食堂です」とは宣伝できません。周囲から「あそこに行く子は貧困だ」と差別されてしまいますから。だから多くのこども食堂は「一人でご飯を食べている孤食の子はここに来て、みんなでワイワイ楽しく食べよう」というコンセプトで広報宣伝をしています。実際、母子家庭など、ひとり親家庭では相対的貧困率が五〇パーセントを超えていて、お母さんは朝から晩まで、土日もなくダブルワーク、トリプルワークで働いているとしたら、子どもは孤食にならざるを得ません。
条件めいたことは一切言わず、「誰でも自由にどうぞ」と、すべての子ども、すべての人に扉を開けているところもたくさんあります。結果として、特に貧困というわけではない普通の子ども、親子、さらには一人暮らしの高齢者など、あらゆる世代の人々が楽しく集う場となり、地域で子どもらしく遊べる空間のない都会の子どもたちや、頼る人のいない「孤育て」に悩む若いお母さんたちの心のオアシスとなっていたり、あるいは、子育て世代を真ん中に、赤ちゃんから高齢者まで多世代の交流の場になっている・・・という姿が、よくマスコミで

も取り上げられています。
いっそ「こども食堂」ではなくて、「地域食堂」でいいじゃないか、という人もいます。
確かに条件をつけずに誰でも出入り自由な地域のコミュニティができれば、その中には必ず「困難を抱えている子ども」やその親もいるはずですから・・・。

支援が必要な子どもや親に対象を絞ったクローズドの場なのか、誰でも行けるオープンな地域の交流の場なのか、こども食堂のあり方に運営者は迷い、悩みながら試行錯誤を繰り返し、前進したり後退したり、でも一度始めた子どもたちの居場所を途中でなくしてしまわないように、何とか続けようと頑張っています。

レインボーリボンはまずは対象を絞って、半ばクローズドのこども食堂から出発しました。そこで試行錯誤を重ねながら、半年後にはオープンなもう一つのこども食堂を開設しました。オープンとクローズド、両方のやり方を経験し、三つめに開設したのは完全クローズドの登録制、学習支援もありのこども食堂です。みんな迷いながらやっているとはいえ、ここまで試行錯誤を重ねている団体もそうそうないと思います。
教育の世界でも福祉の世界でも、食に関わる世界でも、すべてにおいてシロウトの私たち。
「こんな子ども食堂を作りたい」という「理想」を追い求めながらも、いつも子どもたちの「現実」に追い越され、今現在も右往左往しながら「理想のこども食堂」って何だろうと悩み迷い続けています。

レインボーリボンが「こども食堂」の開設に動き出したのは、二〇一五年です。
豊島子ども WAKUWAKU ネットワークの栗林知絵子さんが出演した二〇一四年四月ＮＨＫの「あさイチ」を私が忘れられず、子どもの貧困問題について少しずつ勉強し、栗林さんの講演も聞きに行き、「葛飾区でもこども食堂、やってみたい」と仲間に相談して、動き始めました。
二〇一六年四月からこども食堂を始めてみて、やっているうちにだんだんわかってきたのは、やっぱりこの問題、「子どもの貧困」という問題も、「目の前で実際に起こっていたこと」だったんだ、ということでした。

厚生労働省が二〇一四年に発表した「子どもの相対的貧困率」十六・三％、六人に一人の子どもが相対的貧困状態にあるという数字、二〇一七年発表では十三・九％で「七人に一人」と言われるようになりましたが、当時、「六人に一人」というショッキングな数字を見ても、自分の身の周りの子どもたちに置き換えて考えることは難しいと思っていました。相対的貧困は絶対的貧困とはちがって、ボロボロの服を着ているわけでもないし、ある程度の年齢になればプライドもあり、家庭の困窮具合などは外に見せないようにするものだからです。実際、こども食堂で出会う子どもたちも、きれいな服を着ているし、特にやせ細っているような状態でもありません。ただ、笑顔を見せてくれるようになるまでに時間がかかるのです。家庭に経済的困窮があったり、周囲の無理解や差別によって傷ついている子どもは、表情ですぐにわかります。

子どものこういう表情、こういう感じ、どこかで見たことがあるな・・・と思いあたったのは、やっぱりＰＴＡ広報の現場でした。当時、一年生から六年生まで二クラスずつ、十二人のお母さん。十二人のうち、必ずと言っていいほど、二人は活動に参加しない人がいました。十二分の二、六人に一人です。

ある年のＰＴＡ広報部、第一回めの部会を開いたときのことを思い出します。その年も部長を引き受けた私は、「皆さん働いている方も多いので、これから一年間、部会は土曜開催でいいですか？」と投げかけました。会議では土曜開催で決まりましたが、その後、一人のお母さんが申し訳なさそうに私に言いました。
「すみません。土曜も仕事をしているので・・・」
私は「何曜日がお休みですか？」と訊きました。その時のそのお母さんの答えが忘れられません。
「月曜日から日曜日まで働いているんです」。
当時、私は貧困問題をまったく知らなかったのです。今、こども食堂で表情がとぼしい子どもや、不安そうな表情の子どもを見ると、あの時、あのお母さんの腕にまとわりついて離れなかった六年生の女の子の顔が重なります。ひとり親世帯の子どもの相対的貧困率は五〇・

八％。二人に一人です。
目の前で起こっていたことだったんだ、と今さら気がつきながら、今、寂しい顔をしている子どもたちが少しでも笑顔になれるように、こども食堂をがんばっています。

もう一つ、栗林さんのキャッチフレーズ、「おせっかいしましょう！」も、実はレインボーリボンの原点そのものだったのです。
自分たちの活動に名前をつけようと思ったとき、一番最初に浮かんだのは「おせっかいおばさんの会」でした。外国人のお母さんにお節介をしようとしていたので。でも、どこかに電話するときに「おせっかいおばさんの緒方です」って言うのはちょっとなあ・・・と思って、「レインボーリボン」にしました。
後に、二〇一六年一月、私たちがこども食堂を始める直前、葛飾区生涯学習課が運営する区民大学に栗林さんを講師として招きました。その時、講座参加者から「身近にも気になる親がいるんですよね」という発言があり、栗林さんはこう答えていました。
「ピンチはチャンス。『困ったお母さん』は『困っているお母さん』。モンスターだとか常識がないとか遠ざけるのではなくて、どんどん声をかけておせっかいしましょう！」
この言葉に「あ、そうだ！」と思ったのです。
外国人のお母さんたちは「困ったお母さん」だとか「常識がない」とか言われていたのです。
学校のプリントが読めなくて困っている外国人のお母さんたちを助けたいという原点から歩き始めた私たちが、こども食堂まで手を広げちゃって大丈夫かな・・・と正直、ビビっていましたが、レインボーリボンとしては、ぐるっと回って、原点に帰ってきただけなんだなと思いました。

最初に始めたのは二〇一六年四月、「パルこども食堂」です。

子どもの貧困問題を勉強したり、栗林知絵子さんの講演を聞きに行ったりして、「こども食堂をやりたい」という気持ちが私の中でどんどん膨らみました。イメージとしては、やはりＮＨＫでも紹介されていた豊島子ども WAKUWAKU ネットワークの「あさやけ子ども食堂」です。地域のひとり暮らしの高齢者が一軒家の自宅を開放し、我々ボランティアがお掃除や調理を担当します。親が仕事で遅いために夕飯を一人で食べている小学生とか、赤ちゃん連れのシングルマザーとか、いろいろな人がワイワイと食卓を囲み、食事が終わったら子どもたちは親戚の家に遊びに来たように遊びまわる・・・。
私には実は、狙っている高齢者がいました・・・なんて言うと人聞きが悪いですが、それは地域で昔から活躍されているベテランのボランティア活動家で、会う人誰もがその穏やかな笑顔に惹き込まれてしまうような、素敵な女性です。仮にＵさんとしましょう。
Ｕさんにはファンが多いのですが、中でもＵさんを尊敬してやまないという風で、いつも一緒に行動されているＮさん。Ｎさんも近所でひとり暮らしです。私はＮさんのご自宅を狙っていました。
まずはＵさんを口説きました。「Ｕさん、こども食堂って知っていますか？」「え、な～にそれ」。実はかくかくしかじかで・・・。話はトントンと進み、ＵさんからＮさんへ。Ｎさんも乗り気だというので、詳しく説明しようと会ってみると、Ｎさんの開口一番は・・・
「絨毯、買ったの！」
え？
「うちの玄関、広いのよ。寒いの。子どもが風邪ひいちゃったら困るでしょ？」
そこまで乗り気でいてくださったとは・・・。

次に相談したのはレインボーリボンの仲間です。今までの活動とはあまり関連しない（と、その時は思っていた）こども食堂事業、賛成してもらえるかどうか内心不安でしたが、仲間の反応は、「Ｎさんが絨毯まで買っちゃったんだから、やるしかないじゃない！」でした。

実はその後、いろいろ検討した結果、残念ながらＮさんの自宅での開催は断念することになり、公共施設である男女平等推進センター（ウィメンズパル）の調理室で行うことになりました。ウィメンズパルのこども食堂なので「パルこども食堂」です。結果的には、ひとり暮らしの高齢者のご自宅を開放してもらうという当初のイメージとは、まったくちがう形態となりました。
しかも、Ｎさん自身は第一回の開催で三時間も立ちっぱなしで調理ボランティアに従事した結果、腰を痛めてしまい、その後は参加できなくなってしまったのでした。
でも、何事も最初の一歩を踏み出すのはとてもたいへんなことで、とにもかくにもレインボーリボンが「こども食堂」という未知なる事業に踏み出せたのは、あの「Ｎさん絨毯買っち

ゃった事件」だったんだよな～と思うと、今でも可笑しいというか、何というか・・・。
起爆剤は意外なところにあるものです。

ネットワークは活用すべし、先輩は頼るべし

パルこども食堂を開設するまでには、さらにもう一人、ＮＰＯ法人「ハーフタイム」の代表、石原啓子さんにも相談にのってもらいました。
石原さんとは葛飾区の民間団体のネットワーク「かつしか子ども若者応援ネットワーク」で知り合い、区民向けの講座「子どもの貧困を考える」を共同開催したこともありました。
石原さんに相談したのは、こども食堂に来てほしい「対象となる子ども」を連れてきてくれると期待してのことでした。石原さんは区の生活課で生活保護のケースワーカーを二十年以上務めた人です。早期退職して今はＮＰＯに専念していますが、もともと「ハーフタイム」は現職のケースワーカーが中心となって作った、子どもの貧困問題に取り組む団体です。様々な困難を抱えている子どもたちが安心して集える「居場所」を運営しています。
石原さんは生活保護費のお金だけ渡していても貧困の連鎖は断ち切れないと言います。例えば母子家庭の子どもが学校で「おまえんち、お父さんいない」とからかわれ、いじめにあって、学校に行けなくなったとします。小学校の低学年からずっと不登校でいると、時計が読めないのです。計算もできません。ちゃんとした就職は難しくなります。大人になっても貧困の連鎖から抜け出せないのです。
貧困問題がいじめの問題に、不登校や引きこもりの問題に、低学力、生活困難の問題に、どんどん連鎖していく負のスパイラルに陥ってしまいます。ここから抜け出すためには、子どもが自分自身を大切な存在なんだと信じられる自己肯定感、自尊心を取り戻し、人とのコミュニケーションを恐れる必要のない温かな環境の下で、将来の夢を抱き、そこに向かって努力する気持ち、手段（学習や体験）が必要です。
ハーフタイムはそんな問題意識から「居場所」を運営しています。「こども食堂」とほとんど同じです。いえ、まったく同じです。

やはり石原さんの助けを借りて、葛飾区で困難を抱える子どもたちのための無料学習塾「寺子屋」を運営している別のＮＰＯ法人もあります。
ＮＰＯ法人 Learning　for　ALL（ＬＦＡ：ラーニング・フォー・オール）はウィメンズパルの会議室を借りて、週に二回、「寺子屋」を開催しています。通ってくるのは主に高校受験を控えた中学生です。

パルこども食堂は寺子屋で勉強している中学生とその家族、それにボランティアで勉強を教えてくれているＬＦＡの大学生を狙って、開設しました。そのため、第一回開催から狙いどおりの「お客さん」がちゃんと入り、毎回小中学生が十人前後、大学生が十人前後、ボラ

ンティアスタッフと見学の大人で十人前後、だいたい三十人くらいの賑やかな食卓が実現できています。
数年で全国にこども食堂が三百カ所以上開設されたという「こども食堂ブーム」の始まりの頃でしたが、世間の注目度が高くても地元の子どもたちに根付くまでには普通は時間がかかるものです。初回は子どもがゼロで、視察の議員ばかりだったというケースも聞きました。
そんな中、パルこども食堂のスタートは本当に恵まれていました。

もしも私たちと同じように「子どもの貧困問題」についてはシロウトだという人が、こども食堂を始める時には、ぜひ、貧困問題のプロというか、現場を知っている先輩を頼ると良いと思います。
ＮＰＯなど地域で活動している先輩や、あるいは行政の福祉関係の職員さん、相談員さんなど。まずは貧困問題の実態、現実を教えていただく、勉強することから始めるのが、遠いようで近道だと思います。

もう一つ、「パルこども食堂」の出発が比較的スムーズだった理由は、地元、葛飾区のネットワークをフル活用したから、とも言えます。

ＰＴＡ広報部が外国人の保護者と共に多文化共生のＰＴＡ作りに挑戦しているというレインボーリボン成り立ちの話をとても面白がってくれて、応援してくれた区役所の生涯学習課の職員さんがいました。
悲しいことに、二〇一三年八月にご病気のため若くして他界されてしまった小菅哲朗さん。
ある集会での私の発言に関心をもってくださって、「ちょっと話を聞かせてよ」と区役所に呼び出されたのは十年ほど前のことです。小菅さんは聞き上手で、私は夢中になって喋り続け、ようやく喋り終わって時計を見たところで、「三時間たってる・・・」と驚いたことを思い出します。
それ以来、小菅さんの同僚や後輩の職員さんがずっとレインボーリボンを見守ってくださっています。
法人化した二〇一四年、私は生涯学習課が管轄している「区民大学区民運営委員会」の委員になりました。一般公募で集まった区民運営委員が、「区民大学」と銘打った講座を企画運営する仕組みです。

この区民運営委員会で私が出した企画書は「いのちの居場所を求めて――子ども支援ボランティア講座」です。
全五回の連続講座で、第一回の講師は栗林知絵子さん、第二回は葛飾区の児童養護施設「希望の家」職員の笹尾正乃さん、第三回は不登校問題の第一人者であり東京シューレ葛飾中学校校長の奥地圭子さん、第四回は渋谷などの繁華街で少女を組織的犯罪から守る活動をし

ているＮＰＯ法人ＢＯＮＤ（ボンド）プロジェクトの橘ジュンさん、第五回はハーフタイムの石原さん、という意欲的な企画です。
二〇一六年一月から二月にかけて実現したこの講座は、大成功でした。毎回、定員を超える応募があり、虐待、不登校、犯罪被害、子どもの貧困という課題に関心を持つ区民が熱心に講師の話に耳を傾け、最終的には「こども食堂をやってみたい」「何か協力したい」という気運が高まりました。
この成功の波にのって、翌年度の二〇一六年六月から七月にも「いのちの居場所『こども食堂』をつくろう」という実践編の三回連続講座を実施しました。

区民大学講座を通して出会った人のネットワークは、たいへん貴重なものでした。講座参加者の何人かが、今、レインボーリボンの三つのこども食堂の主力スタッフとなっています。また、それぞれ独自にこども食堂の立ち上げに動いていた人たちも、講座を通じて連絡先を交換し、その後の情報交換、寄付食材の融通など、助け合う関係性ができました。
葛飾区にはこの年だけで三つのこども食堂が生まれ、その後も増え続けています。今では十カ所の食堂がお互いに助け合い、そして、講座でもお世話になった「希望の家」や東京シューレなど、いろいろな団体、個人の皆さんに助けられています。
二〇一八年四月からは区の助成金制度も始まり、新たにこども食堂を始める団体も出てきました。以前から社会福祉協議会主催の講座などで知り合った人々で作っていたメーリングリストを基に、「かつしか子ども食堂・居場所づくりネットワーク」も動き出しました。

武道は「礼に始まり礼に終わる」と言いますが、ボランティア活動は「ネットワークに始まりネットワークに終わる」と言っても良いのではないか、と私は思います。人との出会いから始まり、人との繋がりによって助けられて、続いていくからです。

余談ですが、区民大学区民運営委員会で私が提案した子ども支援講座の企画案は、実は廃案寸前までいった場面がありました。
区民運営委員会では、何人もの委員がそれぞれ関心のあるテーマに沿った講座企画案を提案していて、限られた予算の中ですべての企画を通すことはできないため、どの案を採用するか、どの案を見送りとするか、決めようというときでした。
いろいろな経緯があって、「それでは緒方さんの案は今回は見送りということで・・・」という議論の結論に、私自身、反論できずにいたのですが、この時、「何言ってるんだ！緒方さんの案が一番しっかりしてるんだ！」と「ちゃぶ台返し」をしてくれたのは、なんと「高齢者の生き甲斐」をテーマとする企画を提案していた高齢の男性でした。一見、「子ども支援」とは最も遠いところにいると思われた人が、ギリギリの崖っぷちで私の企画を救ってくれたのです。
「いのちの居場所」というネーミングはこの方の発案でした。

講座企画を詳しく話し合っていた時期、二〇一五年八月、大阪府寝屋川市で中学一年生の女の子と男の子が、まさに居場所がなくて、一晩中街をさまよった挙句、見知らぬ男に殺されてしまった事件がありました。遺体となった子どもの胃袋はほとんど空だったという報道に、涙が止まりませんでした。誰か一人でも、「ご飯は食べたの？」「うちに泊まっていきなさい」と言ってくれる地域のおせっかいおばさん、おじさんがいれば、この子たちは命を奪われずに済んだのです。
地域に子どもたちの「いのちの居場所」が必要なんだと、講座企画チームは思いを強くしました。

この講座を企画したことが、私自身、自分がどんなこども食堂をやりたいのか、何のためにこども食堂を始めるのか、という理念の部分も深く考える機会となりました。
そもそも、こども食堂とは何のためにやるものなのか・・・。

今でもこども食堂に対する誤解はまだまだ多いようですが、中でも私が一番驚いたのは、こども食堂を始めて二年近く経った頃、ある公益財団法人から届いた手紙です。
こども食堂を対象に助成金を出しますので応募しませんかというお誘いの文章でしたが、その中に「我が国の六人に一人の子どもが学校給食以外の食事をとれないという現実」とあったのです。「そのような子どもたちに無料で食事の提供をしている団体・個人に対して本基金では活動の支援を行います」と。
いやいや・・・。どこからツッコミを入れたらいいの？と、思いました。

まず、「六人に一人の子どもが貧困」という時の「貧困」とは、厚生労働省が二〇一四年に発表した「十六・三％」という「子どもの相対的貧困率」です。ちなみに、この公益財団法人のお手紙が来た二〇一七年末には、すでに新しいデータが発表されていて、子どもの相対的貧困率は「十三・九％」「七人に一人」に若干改善されています。
簡単に言うと、一番貧しい人から一番豊かな人まで一列に並べたときの真ん中の人の所得を「中央値」とし、その「中央値」の半分に満たない所得しかない人が「相対的貧困」にあるという計算の仕方です。中央値の半分にあたる、日本の貧困ラインは、だいたい年間百二十二万円、月収十万二千円未満だと言われています。（ただ、世帯人数によってもラインは変わります。貧困ラインの算出は難しいようです。）
「未満」の中には限りなくゼロに近い人もいるでしょうから、「給食以外の食事がとれない」子どもがいることも、十分、考えられます。実際、都内のある自治体が小学五年生の保護者を対象に実施したアンケート調査では「お金が足りなくて過去一年間に食料を買えないことがあった」という項目に、一・四％が「よくあった」と、四・三％が「ときどきあった」と答えています。
こういう家庭には本当に無料で、無条件で、食糧を提供するべきだと思います。それは私た

ち民間のこども食堂ではなくて、国民に文化的な最低限度の生活を保障する義務を負っている国の責任でやるべきです。
憲法第２５条「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」。
生活保護制度はきちんと機能しているのでしょうか。

この公益財団法人がイメージしているようなこども食堂もあるかもしれませんが、生活保護制度に匹敵するような役割を担おう、あるいは担えると考えてやっているところはほとんどないと思います。

私たちがこども食堂でやろうとしていることは、子どもに安心安全な居場所を提供すること、子どもに笑顔を取り戻すこと、楽しい思い出を作ること、自分は大切な存在なんだと感じてもらうこと・・・、そういうことだと思うんです。

パルこども食堂のミッション（目的）を「子どもがホッと安心できる『いのちの居場所』を作る」としたのは、私たちが「いじめ防止」「暴力防止教育」の必要性を訴え続けてきたこととも関係があります。
親が衝動的に暴力をふるったり暴言を吐く家庭で育った子どもは、自分の命も他人の命も大事だとは思えないでしょう。「うるさい」「死ね」と言われ続けた子どもは、教師や友だちにも「うぜぇ」「死ね」と言うでしょう。親が子どもをテストの点数やスポーツの成績だけで評価し、その子が何を見て嬉しいと思うのか、何を経験して楽しいと感じるのか、子どもの気持ちに関心を示さないとしたら、その子どもはやはり他人の気持ちを大切にはしないでしょう。
家庭だけの問題ではありません。ある子は、突然学校に行かなくなり、自分の部屋に机や椅子でバリケードを築いて閉じこもってしまったといいます。また別の子は、学校に行こうとすると過呼吸になり、なんとか校門をくぐっても、他の生徒に見られないよう怯え、隠れながら保健室にたどり着くのだといいます。
「いじめ」なのか「体罰」なのか、それぞれの原因はその子が話してくれない限りわかりませんが、学校で子どもの心を深く傷つける「暴力」があったことは確かだと思います。
前述の二〇一五年八月の大阪府寝屋川市の事件をはじめ、街で子どもが残虐な犯罪の犠牲となる事件も頻繁に起こっています。いま子どもたちが置かれている日常は暴力にあふれているのです。まるで戦場のようです。

子どもが子どもらしく、ただ楽しく遊べる場所、みんなで美味しく楽しく食べる場所、そこで心が休める居心地の良い居場所を作りたい――そう思いました。
子どもが寂しい気持ちを抱えている時、自分が大切な存在だと思えない時、将来に希望なんて感じられない時、「そんなことないよ」とか「もっと頑張れ」と、否定したり変わること

を要求するのではなくて、そのままの気持ちを受け止めて「そうなんだ」「たいへんだったね」と、丸ごと受けとめる大人になりたいと思ったのです。

前述の講座参加者をはじめ、「こども食堂でボランティアをしたい」と申し出てくださる方がたくさんいました。その中には六十代、七十代の方もいらっしゃいました。私のように「こうなりたい」と努力しなくても、自然に、子どものありのままの姿を包み込んでくれる温かな雰囲気を持っています。
こども食堂は高齢者の居場所にもなるし、高齢者が子どもと交流することは双方にとって、とても幸せな時間を生み出しているということは、全国の多くのこども食堂で実証済みですね。
パルこども食堂に準備段階から関わってくださって、その後、「あおとこども食堂」、「よみかき宿題こどもカフェ＠なぎ」と、レインボーリボンの第二、第三のこども食堂でもいなくてはならない大切な存在となっているＹさん。いつも杖をついて、タクシーに乗って来てくれます。Ｙさんがいるので、安心して来てくれる子もいますし、子育ての日々のストレスをつぶやいてくれるお母さんもいます。何よりも、Ｙさん自身が心からこども食堂を楽しんでくださっている様子が、全体の安心感を醸成しています。
また、「認知症予防の料理教室が面白かったから、今度はこども食堂でお手伝いがしたい」と電話をくださったＳさん。いつも両手にどっさりと食材を買い込んで、汗を拭き拭き来てくれます。時間内に調理が終わるように全体の指揮をとってくれる「料理長」役です。「お替わりあるわよ～」と、ピーマンの煮浸しなどもドシドシお皿に盛っていきます。が、そんな渋い料理がまた、子どもに好評なのです。

　パルこども食堂は月に一回開催のイベント型です。一ヵ月にたった一回でも、大好きな大学生ボランティアのお兄さん、お姉さんと一緒に食事をして、地域のおばさん、おじさんがお節介を焼いてくれる場があるということが、どんなに子どもたちを変えたか・・・私たちはこの後、目をみはることになります。

例えば、開催第三回目のことです。

第一回からとにかく私は張り切っていまして、食事が半ば終わりかけた時間帯に参加者全員の自己紹介を「強制」していました。ただご飯を食べるだけじゃなくてコミュニケーションを図ろうと、ある意味、強制的に一人ずつ、みんなの前で喋らせていたのです。寺子屋の中学生たちはもちろん、迷惑だったでしょう。知らないおばさんたちがたくさんいる場に来たというだけでも緊張しているのに、その上、みんなの前で自己紹介させられるなんて。ほとんど一言も発せられない子がほとんどでした。
その第三回。この日のコミュニケーション・ゲームはさらに難しいお題で、「最近ハッピー

だったことは何？」というものでした。さすがの私も「中学生にはちょっと無理かな〜。大学生の皆さん、どうですか」と投げかけたのですが、ところが、「はい！」と一番最初に手を挙げたのが、なんと中学二年生の男の子だったのです。
しかも、そのスピーチの内容にさらにビックリでした。当時、東京都知事が公費を使って温泉旅館に通ったり、高価な美術品を購入しているという不正事件が大きな話題になっていたのですが、彼はこのことが「許せない」と、みんなの前に立って、しっかりと話しました。
「最近ハッピーだったこと」というお題とは違いましたが、この時、彼がみんなに受け止めてもらいたかった気持ちを素直に表明したのだと思います。
たった三回、一緒にご飯を食べただけなのに、いつも伏し目がちの思春期の男の子の、この立派なスピーチに、大人はただただ感動して、「ありがとう」でした。

月に一回のこども食堂で「子どもの貧困」という社会問題が解決されるはずがありません。
私たちはただ、地域の子どもたちと出会って、その子が安心できる居場所を作り、その子の成長を見て喜んでいるだけです。
でも、こんな居場所がどんどん増えて、子どもが自己表現したり、自己尊重感がアップしたり、それを見ている大人が子どもの成長欲求を阻害する「格差社会」を正そうと決意すれば、きっと世の中は変わる、と信じています。

この年、二〇一六年の九月、「広がれ、こども食堂の輪！全国ツアー　キックオフイベント」で「こども食堂」の名付け親「気まぐれ八百屋だんだん　こども食堂」の店主・近藤博子さんが「こども食堂はかわいそうな子どもにご飯を食べさせる場ではなくて、いろいろなアイディアや知恵を持ち寄る場になっているし、子どもも大人にパワーを与えている。子どもの自己肯定感をアップさせる場にもなっている」と発言されたときには、パルこども食堂の半年間をズバリと表現してもらえたような気がしました。

しかし、美談ばかりではありません。
月に一度会うか会わないかという薄い関係性で、傷つきやすい思春期の子どもたちに接しているのだという危うさに、私はあまりにも鈍感でした。
翌年の三月、十二回めの開催日はパルこども食堂の一周年にもなる記念の回でした。寺子屋の中学生は高校受験前の三年生が多かったので、我々としても初めて、中学を卒業する子どもたちを見送る回となります。
この時の料理長は、一番最初にこども食堂の開設を相談したベテラン活動家、Ｕさんです。
Ｕさんは栄養士の資格も持っていました。毎回、子どもたちに「今日一番美味しかったものは？」と聞くのですが、意外にも・・・と言っては失礼ですが、Ｕさんの昆布の煮つけとか、旬の枝豆をゆがいたものとか、昔ながらのシンプルな、でも、きちんと手をかけた料理が一番人気でした。

第十二回パルこども食堂は開催日の前日から調理室を借り、Uさんが「ささげ」のお赤飯を仕込むところから始まりました。
この日は赤飯、ゆかりご飯、筑前煮、味噌汁、昆布煮、具沢山の卵焼き、フルーツポンチという豪華メニュー。スタッフ一同、子どもたちに「卒業おめでとう」と言いたくて張り切っていました。
さて、問題の自己紹介タイムです。
私は張り切りすぎて、大失敗をしてしまいました。一人ずつ自己紹介した中学生に「どこの高校に行きますか？」と訊いてしまったのです。「〇〇高校です」と答えたらみんなで拍手しました。二人目、三人目の子に聞いたあたりで、寺子屋でボランティア先生をしている大学生スタッフが耳打ちをしてきました。
「配慮のないことを言わないでください！」
その直前、一人の中学生が食事の途中だったのに、部屋を出ていってしまったのです。
そうです。まだ、進学先が決まっていない子がいたのです。私は顔面蒼白でした。なんてことをしてしまったのだろう・・・。もう後の祭りでした。

三月の中旬になってもまだ進学先が決まらない子がいるのだということに思い至らないこと自体、私が様々な困難を抱えて生きている子どもの実情に疎い証拠でした。それにも増して後悔したのは、中学生の高校受験に必死に寄り添って支えている大学生ボランティアに比べて、月にたった一回の食事会を開いているだけの自分は、もっと謙虚に子どもに接しなければならなかったのに、「高校合格を誉めてあげよう」といった「上から目線」で、結果的に子どもの心を深く傷つけてしまったことでした。

この時の失敗はこの後、こども食堂関連の講座などで多くの人に告白するようにしています。子どもたちが安心できる「いのちの居場所」であるはずのこども食堂で、大人の思い上がりから子どもの心を傷つけてしまう危険があるということを、皆さんに知ってもらうためです。心の安全を確保するために、私たちは常に謙虚に子どもたち一人ひとりの顔を見て、様子を伺って、気持ちを思いやる姿勢を持っていなければ、と思い知らされた事件でした。

年間三六〇〇円の「一食オーナー」になりませんか？

レインボーリボンの理事会（と言っても、六人のママ友の集まりですが）では、最初のこども食堂を立ち上げるまでにいろいろなことを検討しました。
場所は前述のように、対象の子どもがいる所という意味で最適だった「パル」に落ち着きました。公共施設の調理室なので、食器や調理器具の心配もありません。
調理ボランティアはレインボーリボンの仲間もいるし、区民大学講座の参加者など、希望者が集まっていました。
食品衛生に関しては、私が食品衛生責任者の資格を取り（一日の講習で取ることができます)、保健所の食品衛生課に「給食開始届」を出しました。

問題は運営資金です。
先輩こども食堂の事例を聞くと、食材費は、節約すれば一人分三百円で作れるそうです。でも、衛生のためのマスクや手袋、洗剤や保管容器、会場使用料、チラシの印刷代など、他にもいろいろとお金はかかります。
他所のこども食堂を視察したり、葛飾区の講座にこども食堂運営者の方々に来ていただいたりして、どうやって運営しているのか研究しました。
運営母体がお寺の食堂は、やはり地域での社会的信用が絶大ですから、お米はすべて寄付で賄っていると言っていました。なるほど、食材を寄付してもらえることが重要です。
現金収入という意味で、参加費を取るのはどうでしょうか。場所を高齢者支援施設に借りている食堂は、子どもは無料、六十五歳以上の高齢者は三百円、大人は五百円という料金設定をしていました。「パル」はこれを真似して、寺子屋の生徒とその家族は無料、ボランティアの大学生は三百円、見学の大人は五百円としました。自分たち調理ボランティアも三百円です（後にボランティアは無料としました)。
でも、単純に考えて、無料参加者の倍の三百円参加者がいなければ、毎回赤字です。参加費収入だけでは持続可能な運営とはなりません。
やっぱり寄付金集めは必須です。

ＰＴＡ研修の講師をしたり、いじめ防止講座を開催したりという活動は、あまりお金がかかりません。こども食堂は食材などを購入して料理を作り、人に提供する、万が一の事故に備えて保険もかけるという、レインボーリボンにとって初めて、本格的に財政を考えなければならない事業となりました。
でも、こんな小さな、無名の NPO にお金を寄付してくれる人なんているんだろうか。

他人が自分たちにお金を寄付してくれるなんて、なかなか信じられませんでした。そこで、最初は食材の一食分、三百円だったら寄付してもらえるんじゃないか・・・ということにな

りましたが、郵便振替や銀行口座に入金してもらうのに、三百円では手数料の方が高くなってしまいます。
「一カ月に一回のこども食堂だから、三百円の一年分、三千六百円、寄付してもらおうよ」という結論に落ち着き、かくしてレインボーリボンのこども食堂寄付金集めは「一食オーナー募集。子どもの一食、三百円の一年分を寄付してください」というコンセプトとなったのです。
いよいよ寄付金集めの広報を始め、チラシを作り、周囲の人に渡したり、イベント会場に置かせてもらったりしました。
すると、この「一食オーナー募集」のチラシは、意外にもよく捌けました。ある子育てイベントでは、置いてあったチラシがどんどんなくなって、メンバーが寄付呼びかけのスピーチをするための原稿として手元に置いておいたチラシも、「これ、いただいて良いですか？」と言われてしまったということです。
「こども食堂」というワードに関心が集まっていた時期と重なったのでしょう。それでもまだ、本当に寄付してくれる人がいるとは信じていない我々は、「自分たちで自分たちに寄付しよう」という構えでした。
ところが、本当にいました。寄付してくださる方が。
最初の頃は、現金で、どんどん寄付が集まりました。集めてくださったのは、あのＵさんです。
Ｎさんのご自宅を開放してのこども食堂開催はあきらめ、ウィメンズパルでの開催としたのも、実は、Ｕさんのご自宅とウィメンズパルが目と鼻の先にあり、長年の女性解放の活動家でいらっしゃるＵさんは「ウィメンズパルの主」と言って良いほど、もともとこの施設を活動拠点としていたからなのです。
Ｕさんはここで人権や平和についての学習会を開いたり、女性が心と体をゆったりとほぐすことのできるストレッチ体操の教室を主宰しています。前述したとおり、Ｕさんにはファンが多いのです。Ｕさんが「今度、こども食堂を始めたのよ。子どもに食べさせるお金を寄付してね」と寄付金を集めてくださったのでした。
我々理事も一生懸命、寄付を集めました。職場の上司や同僚、同じマンションの住人、ＰＴＡや地域のボランティア活動で知り合った人たちが「一食オーナー」になってくれました。

そして、次には、知らない企業からの寄付金が郵便口座に、定期的に入金されるようになりました。その会社名をインターネットで検索すると、一つは都内の、おそらく個人経営の写真屋さんです。もう一つは通信社ですが、同名の企業がたくさんあって、特定できません。
個人名での入金、匿名の寄付金もありました。銀行の通帳に「コドモショクドウへ」という入金者名を見たときには、感動で泣いてしまいました。

後々になっても、支援してくださる方から「一食オーナーというコンセプトはいいですね～。

寄付しやすいですよ」と言われています。「パル」に続いて「あおとこども食堂」を立ち上げた時から、ネットでも積極的に広報を展開しているため、寄付者にとっては、寄付金がこういう食材になって、こういう料理になって、こういう食堂で子どもたちの口に入っているのだと、イメージしやすいようです。
もちろん、食材費だけではなくて、衛生用品代や会場使用料にも使わせていただいているのですが、こども食堂事業への寄付はこども食堂事業のためだけに使っています。レインボーリボンの他の事業、ＰＴＡイノベーションやいじめ防止活動には流用しないように、別会計としています。そして、半年に一回程度の、のんびりとした間隔ではありますが、「レインボーリボンのこども食堂通信」を発行し、各回のメニューと参加人数、寄付者、寄付金などを報告しています。

寄付者はＮＰＯにとって、なくてはならない「同志」ですね。寄付者の信頼を裏切らないこと、寄付者の期待に応えることが、ＮＰＯの使命です。
「自分たちに寄付してくれる人なんているのかな」と疑っていた頃は、我々はＮＰＯの体を成していなかったということですね。法人化して三年目にこども食堂事業を始めて、ようやく一人前のＮＰＯ法人になれたような気がします。
こども食堂はＮＰＯ法人でなくても、個人や任意団体でも運営できますが、法人として会計がしっかりしていること、公開されていることは、支持者、支援者を広げるための「強み」になるということが、よく分かりました。

あおとこども食堂

地域に根を下ろす、オープンな居場所を

「パルこども食堂」を何とか立ち上げ、まだ試行錯誤しながら一回一回のメニュー決めや買い物、調理、寺子屋の子どもたちへのお知らせ広報などにアップアップで頑張っていた頃、京成線青砥駅前の商店街で、少し前まで居酒屋さんだった店舗の空きスペースをこども食堂に貸してもらえるという話が舞い込んできました。

区議会でいじめ防止教育の普及を主張してくれていた区議会議員さんの紹介でした。

青砥駅周辺、葛飾区青戸はレインボーリボンの活動拠点です。

「パルこども食堂」立ち上げからまだ半年というこの時期に、無謀にも「あおとこども食堂」の立ち上げを決意したのは、あまりにも素晴らしい立地条件に目がくらんだ・・・ということ。それに、もう一つ、私には「オープンなこども食堂を作りたい」という野望がありました。

こども食堂は子どもが安心して来られる居場所でなければなりません。

「パルこども食堂」に子どもたちが安心して来られるのは、基本的には寺子屋の子どもたちを対象とした居場所であり、「相対的貧困」という、その子の背景をからかったり、いじめの理由とするような同年代の子どもは来ないという前提があってのことです。また、世間から特別視されないこと、貧困問題の象徴と見られないことが非常に大切です。だから、「パル」はある程度クローズド（参加者限定）にならざるを得ないのです。

大々的にチラシを撒いて「何月何日にやっていますよ、みんないらっしゃい」と宣伝するわけにはいきません。見学や取材の申し込みにも神経が尖ります。

全国で何百カ所も誕生しつつあったこども食堂の多くが「対象の（貧困問題を抱える）子どもたちに来てもらえない」という悩みを抱えている中、「パル」はターゲットのど真ん中の子どもたちに来てもらえる機会をつかんでいたのですが、一方、対象を広げられないクローズドの限界も感じていました。

子どもの生きづらさは様々です。経済的に裕福な家庭の子どもでも、虐待を受けているかもしれません。共働き家庭で一人で晩御飯を食べる孤食の毎日を送る子もいます。いじめを受けている子どももたくさんいます。

そんな子たちがホッと安心できる居場所を作りたい・・・。

二〇一六年の八月から九月にかけて、「あおとこども食堂」立ち上げをめぐり、またまた、喧々諤々のレインボーリボン理事会が開かれました。

私の提案は、あおとこども食堂の料金設定は子ども三百円、大人五百円としましょうというもの。そして、すでにパルこども食堂でつながっている親子や、民生委員さんなどの紹介で経済的な配慮が必要だと思われる参加者については、一食オーナーからの「プレゼント券」を充てて実質無料とする、というアイディアでした。

が、最初は、「近隣小学校などに広くチラシを配って、誰でも入れるオープンなこども食堂にする」という私の提案は猛反対されました。

「こども食堂の趣旨とは関係なく、安いというだけで人が押し寄せてしまうのではないか」という懸念が強く出されました。

チラシ配布の前に、民生委員、学校の先生などにまず集まってもらい、こども食堂の趣旨を理解していただく、そして「ひとり親家庭」「外国人の家庭」など、こども食堂に来てもらう対象者をはっきりさせ、対象になる子どもを民生委員さんなどに連れて来てもらう・・・という案に、いったん決定しました。

しかし、「民生委員、学校の先生などに集まってもらう」ということを、いざ実行しようと思った段階で、「無理だ」と思いました。私にそこまでの人脈、権限はありません。

そもそも、まだ始まってもいない「あおとこども食堂」に子どもを連れて来ると、公的な立場の人が約束できるはずもありません。子どもの集客は、やはり実施主体である私たちがやるべきことです。

「ひとり親家庭」「外国人の家庭」など、対象をはっきりさせるということも、よく考えてみると子どもに対する「ラベリング」です。レッテル貼りです。

レインボーリボンのミッションは、「多文化共生の子育ち・子育て環境をつくる」ということでした。その子どもの家庭環境がどうであろうと、その子の文化的背景として受け入れられ、尊重され、その子が安心して自分らしさを発揮できるということが多文化共生の環境です。こども食堂で最初から対象者の文化的背景を限定するということは、その子に対する「ラベリング」となり、子どもは「自分らしさ」を発揮することが難しくなってしまいます。

私としては理事たちを説得するために、どんな「あおとこども食堂」を作りたいのか、理想像を必死に説明しました。

パルこども食堂が子どもにとって安心して来られる場所だとしたら、それは集客の方法を「寺子屋クラブの中学生とその家族、ボランティアの大学生」に限ってお知らせしているからです。逆に、「あおとこども食堂」が子どもにとって安心して来られる場所になるためには、「誰でも来られる場所」でなければ・・・。「ひとり親家庭の子」「日本語ができない子」などのラベリングをされない場でなければならないと。

ちょうどその頃、栗林さんたちが九月二十八日からスタートさせた「広がれ、こども食堂

の輪！全国ツアー」の理念がネットで広まっていました。「こども食堂が子どもだけでなく、その地域のすべての人たちにとって欠かせない空間になり、子どもが抱える問題を発見し、そこに集まった人たちで解決の方法を考え、次の支援へとつなげる場所になっていく」という未来像が示されていました。

レインボーリボンにとっては、まずは「青戸周辺の小中学生が一人でも来られる、その親も来られる、乳幼児連れの親、子どもとふれあいたいボランティアも来られる、オープンな空間をつくる」ことが何といっても最初の目標になるんだと、私は主張しました。

その上で「困難を抱えた子どもや親」も安心して来られるように配慮したいと。

困難を抱えている子どもの環境には「困難を抱えている親」がいるかもしれません。また、その親子の存在が気になっている人、迷惑に感じている人、支援しようとしている人など、様々な人がいます。

例えば、不登校の原因が「いじめ」だった、さらに、その「いじめ」の原因がその子のコミュニケーション能力の不足にあった、なぜコミュニケーションが苦手だったかというと、その子に発達障害があった・・・というような場合。

発達障害があっても知的障害がなければ親は我が子を「障害児」とは認めたくない、受け容れられないという場合が多いようです。我が子が学校で問題を起こしたとしても、「先生の指導が悪い」「相手の子が悪い」と逆ギレし、モンスター扱いされてしまう例もあります。

そんな親を「困ったお母さん（お父さん）」と感じている人もいるし、逆に発達障害についての正しい知識、理解を親にももってもらって、その子の個性を伸ばす特別支援教育につなげたいと考える支援側の人もいます。

こども食堂ができることは、まずその子が安心して自分らしさを発揮できる場を作ること。何が得意で何が苦手か、何が好きか嫌いか、その子らしさを観察して、面白がること。褒めたり励ましたりすること。苦手なこと（例えば「他人の気持ちを想像すること」など）がわかったら、その場で具体的なアドバイスをすること。〇〇ちゃんはこの遊びはしたくないみたいだから、こっちの遊びをしようと提案してみるとか。

その子がこども食堂で元気になって、その場が好きになって、親にも元気をあげられるようになったら、親もこども食堂に来て、地域の人に見守られている安心感を得たり、子どもの成長を感じて将来に希望が持てたり・・・。

親もエンパワーメント（夢や希望を持ち、力を発揮できること）され、我が子の将来に希望が持てれば、困難を抱えている気持ちを人に話せたり、困難を克服するために行動を起こしたりということができるようになるでしょう。親が変われば、周りで迷惑がっていた人も理解を示してくれるようになると思います。より好意的な理解者になろうと、こども食堂に顔を出すかもしれません。

こういう理想の姿を目標として掲げて、まずは私たち自身が「障がい」の捉え方や、「外国にルーツをもつ子ども」「相対的貧困状態にある子ども」「性的マイノリティーの子ども」など、困難を抱える可能性の高い子どもの現状について勉強し、机上の勉強だけではなく、

実際に子どもたちと接しながら「多文化共生」のスキルを磨く必要があると訴えました。
　それから、貧困や障がい、病気など、困難を抱えた人にとってどんな助けが必要なのか見極める力、行政の窓口や専門家、専門施設などに関する知識、人的コネクションも蓄積していかなくてはなりません。困っている人にとって行政窓口とか専門機関の前には高い壁があります。私たちシロウトがやっているこども食堂だからこそ、すんなりと、上手に支援の輪をつなげていけるように、常にアンテナを高く、情報収集していく必要があります。

　「困難を抱えた人を助けられる場」と、「誰でも来られるオープンな場」は矛盾しないとも主張しました。
　相対的貧困の状態にある子どもは当時の統計で十六・三パーセント（六人に一人）、発達障害の疑いのある子どもは六・五％（十五人に一人）、性的マイノリティーは日本の人口の五・二％（十九人に一人）です。何らかの「困難」を抱えて生きているということは、それほど珍しいことではない・・・というか、そういう背景や特性は最初から「困難」なのではなく、社会的な問題として解決するための国の政策がなかったり、社会の無理解や偏見、差別によって子どもの自己肯定感が低下したり、適切な支援・教育を受けることができず負のスパイラルに陥ることによって「困難」が生じるのだと思うのです。
　背景や特性を理解した上で、その子にあった支援や励ましがあり、その子の成長を喜ぶ大人がいれば、それは「困難」ではなく、むしろ踏み台、チャンス、個性、強みになると思います。こども食堂はどんな子でもその子にあった支援や励ましを与えてくれる大人と出会える場でありたい――。

　ここまでしつこく「説得」されたら、最初は反対していた理事も根負けしました。
　あおとこども食堂は二〇一六年十一月十二日にオープンしました。

「発達障がい」は「脳の多様性」

　強気で理事たちを説得した私も、本当は内心、ドキドキ、ヒヤヒヤでした。
　パルこども食堂は先輩 NPO のハーフタイムの石原さんや、LFA の大学生たちがしっかりと運営をサポートしてくれています。が、あおとこども食堂は初めて、本当にシロウトの自分たちだけで開設、運営するこども食堂です。

　まず、子どもが来てくれるかどうかが大問題でした。
　こども食堂運営者としての実績はまだ半年しかありませんでしたが、私は葛飾区の「青少年委員」など、半分、公的な立場で学校に関わっていたことが幸いし、近隣小中学校の校長先生にチラシ配布を許可していただけました。そのチラシが功を奏したようです。第一回開

催日、二階にある元居酒屋店舗のあおとこども食堂に、小学生の男の子たちが元気に階段を上ってきてくれた時の嬉しさは忘れられません。彼らはその後、月に一回、第二土曜日の開催日を本当に楽しみに待っていてくれて、毎回、オープンの三時を待ちきれずに階段を駆け上がってきてくれる常連さんになりました。

初回には青戸地域の民生委員さんが六人も来てくださって、手作りの紙芝居で子どもたちを楽しませてくれたり、温かいご支援をいただきました。

あおとこども食堂のオープン当初は、やはりパルこども食堂と同じくらいで、子ども十人前後、大人十人前後、ボランティア十人前後の三十人くらいの規模でした。

次にドキドキだったのは、障がいのある子どもを本当に受け容れられるのか、という自分たちのスキルに対する不安でした。

当時、パルこども食堂も寺子屋の子どもだけでなく、スクールソーシャルワーカー（SSW）の紹介で、長期不登校の子どもなども受け入れ始めていました。SSW という専門家が付き添って連れてきてくれる場合は安心ですが、付き添いなしで、「子どもが一人でも来られる居場所」を本当に自分たちは運営できるのか・・・。

特に心配だったのは、発達障がいの子どもでした。

「発達障がい」という障害名で捉えると「他の子よりも劣っている」と思いがちですが、発明王のエジソンや、アップルを創業したスティーブ・ジョブズ、黒柳徹子さんなど、才能あふれる人物が「発達障がい」であるということは有名な話で、「劣っている」のではなくて「脳の多様性」、「発達のバランスにでこぼこがある」と表現した方が的確です。

そういうことは頭では理解していましたが、いざ、本当に発達障がいの子をこども食堂に迎えるとなったときに、理事会ではさんざん理想論をぶちあげた私も、フツーに、「どう接したら良いのだろう」「パニックを起こしてしまったらどうしよう」と、とても不安になりました。

そこで慌てて、臨床心理士の先生を講師に学習会を開催しました。

開催しました・・・と言っても、おカネのない私たち。葛飾区中学校ＯＢＰＴＡ連合会にお願いして、区内に療育施設がある「のぞみ発達クリニック」の臨床発達心理士、黒田未来さんの講演会を「開いてもらった」というのが正しい言い方です。

黒田さんのお話はとても分かりやすくて、これから子どもたちと接していくための自信が持てました。

まず、発達障がいの子どもの割合は小学校七・七％、中学校四・〇％、高校二・二％と言われていて、各クラスに二～三人いる可能性があるということ。障がいの内容は様々で、支援がさほど必要ない人もいるが、必要としている人も多いということです。

コミュニケーションが難しいとか、感覚過敏・鈍磨とか、注意欠如・多動症など、やはり「こういう障がいがあるんだ」ということを知らないと、私たちは子ども支援、親支援のために子どもと接しているはずなのに、「わがままな子」とか「親のしつけが悪い」といった間違った対応をしてしまいそうです。

特に「感覚過敏・鈍磨」で、視覚過敏な子にとって世の中はどう見えているのかとか、聴覚過敏な子には人の話がどんな風に聞こえているのかといった疑似体験を学習会の中でさせていただき、なるほど、こんな「生きづらさ」を抱えているのかと、よく分かりました。

私たち支援者はどう対応したら良いのか。

まず、「見せしめや罰」「感情的な説教・嫌味・無視」「激しい叱責・体罰」など、不適切な対応をしないこと。

基本は相手（障がいのある子ども）を尊重すること。肯定的に関わる。誉めるとか、関心を示すとか。

感覚過敏の子には刺激の少ない環境を用意する。抽象的な指示を出さずに具体的にしてほしいことを伝える。

自傷や他害、かんしゃく、パニックがレッドゾーンになってしまった時は危険を取り除き、場所を移すなど、落ち着くのを待つ。イエローゾーンまで降りてきたら気持ちの代弁、譲歩、かけひき、説明。安全ゾーンになったところで目標の再確認、こまめな評価、振り返り言語化（ストーリー化）。

言われてみればそのとおり・・・普通の子育て、教育の手法ですよね。黒田さんもこれらの支援は障がいのある子だけのものではなく、誰にとっても大切なユニバーサルデザインだとおっしゃっていました。

黒田さんには、発達障がいのある子ども、保護者が置かれている状況、気持ちを理解して、「必要そうな時に手を差し伸べる」という、支援者の心得、基本のキを教えていただきました。

この講演は実際、本当に役に立ちました。

ある親子に食事の前にトイレで手を洗ってきてくださいと促した時のことです。お父さんが小学生の息子を抱きかかえるようにトイレに引っ張っていったかと思うと、「ぎゃー」と男の子が泣き叫ぶ声が聞こえてきました。

あおとこども食堂に場所を貸してくれていた店舗のトイレは臭いがキツかったのです。月に一回のこども食堂開催前と後にはきれいに掃除し、消臭剤もどっさり置いて、二年経った頃にようやく臭いが気にならなくなりましたが・・・。

この子は嗅覚の感覚過敏なんじゃないかな、とすぐに思い当たり、「次回からはトイレじゃなくて、厨房の入口の手洗い場で洗ってくださいね」と声をかけることができました。

次の回、男の子は来たなり、「ここで手を洗っていいの？」と何度も何度も確認していました。「そうだよ」と答えると、うん、と小さく頷いて、ようやく安心して遊びコーナーに

入っていきました。

「障がい」について、私たちレインボーリボンの理事の意識がある程度高かったのは、活動を始めた当初から一緒に「多文化共生のＰＴＡ」を体現してくれた聴覚障がいのあるお母さんのおかげでした。

私たちが小学校の新入生保護者会に「勝手に解説！ＰＴＡ活動」と銘打って乗り込んでいた時、「音が聴こえなくても、一緒に楽しく活動できますよ」という証拠に、その場で簡単な手話を教えてもらっていました。手話文化に触れた人はだいたい、その柔らかさ、温かさ、面白さに魅了されてしまうのです。聴者の文化だけではない、豊かな「障がい者文化」の存在を知るのです。

彼女は後に［手話うたユニット T-ripple（トリップル)］を結成し、パルこども食堂でもあおとこども食堂でもパフォーマンスを披露してくれました。いま、子どもへの虐待をなくすオレンジリボン運動にも活動の幅を広げ、各地の子育てイベントなどに引っ張りだこです。

それから、やはりＰＴＡ活動の財産ですが、娘が中学生の頃、ちょうど学校に知的障がいを対象とした特別支援学級が新設されたので、ＰＴＡ広報として主任の先生にインタビューしたことがあります。

古い時代のイメージで、知的障がい児への教育といえば、集団行動に慣れさせる整列訓練とか、単純作業を覚えさせる職業訓練のようなものを想像していましたが、その先生の「特別支援教育とは」というお話はまったく違っていました。

「まず、保護者の相談から始まります」。

「ＩＱがいくつ以下だから」という振り分けではないというのです。保護者がその子どもについて苦手なこと、心配なことを学校や教育委員会に相談するところから始まり、その子にとって最善の教育内容を考えることが「特別支援教育」なのです。その目的は、その子が社会に出て、自立して生きていけるようになることです。

私はこの先生のお話を聞いて、「特別支援教育」に対する考え方がまったく変わりました。障がいを補うための訓練ではなくて、子どもの自己実現を支援する、子どもの成長欲求に応える教育なのです。

実際にその特別支援学級の子どもたちは文化的・芸術的な才能を、驚くほどの高レベルで花開かせ、私たちに見せてくれました。普通学級も含む全区の中学校総合文化祭でオペラを演じ、金賞を獲るほどのレベルです。

障がいとは、劣っているとか欠けているということではないんだ、豊かな個性と文化なんだと、身をもって証明してくれました。

子どもたちは最初から多文化共生

あおとこども食堂を開催する日、まず我が家では受付で使う名簿や名札、文房具やお知らせチラシ、厨房で使う手袋やマスク、ポリ袋や消毒液、そして夫が数日前から会社からの帰宅途上に買い足してきた野菜や果物などを段ボール箱に準備します。支援者から寄付していただいているお米も忘れちゃいけません。

そうです、あおとこども食堂の厨房を預かるメインシェフは、私の夫なのです。

家族はパルこども食堂の立ち上げ、運営に奮闘している私の姿を見て、実は羨ましかったのかな、とも思います。パルの第一回開催日、調理室を片付け終わって家に帰りついた私は、夫と娘の顔を見て泣き出してしまいました。緊張が解けたのと、パルで出会えた、ひとり親で子ども三人を育てているお母さんの笑顔が、本当に嬉しかったのです。

この時はまだ高校二年生だった娘も、今は大学生になってボランティア参加しています。

あおとこども食堂はボランティア・スタッフが午後二時からお掃除を始め、三時に「遊びコーナー」がオープンします。食事は五時からです。

遊びコーナーのボランティア・リーダーは理事のＴさん。あの、ＰＴＡ広報紙のレイアウトが出来なくて途方に暮れていた私を救ってくれたママ仲間です。ＴさんはＹＭＣＡのボランティアとして子どもたちをキャンプに連れて行く活動などの経験があって、遊びのリードも、子どもとボランティア・スタッフとのマッチングなども絶妙です。

プロ仕様の厨房で夫と一緒に奮闘してくれる料理上手なベテラン主婦、洗い場で黙々と食器の準備と後片付けをしてくれるボランティア、遊びコーナーでひとりぼっちの子どもや親がいないように気を使ってくれるスタッフ――。

気がついてみると、私が理事会でぶちあげた理想のこども食堂――「子どもが安心して自分らしさを発揮できる場」「何が得意で何が苦手か、何が好きか嫌いか、その子らしさを観察して、面白がる場」「子どもがこども食堂で元気になって、その場が好きになって、親にも元気をあげられる」「親もこども食堂に来て、地域の人に見守られている安心感を得たり、子どもの成長を感じて将来に希望が持てる」――という状況が、ことごとく実現できていることに驚きます。

何よりも驚いたのは、子どもの姿です。

パルこども食堂に来ている子どもたちは、当初、我々がラベリングしようとした「困難を抱えている子ども」ですが、この子たちがあおとこども食堂に来て、自分よりも小さい子どもたちの面倒を見てくれるのです。疲れた顔をしているお母さんの代わりに幼児の後をついて安全を見守ってくれたり、幼稚園生とゲームをしてわざと勝たせてあげたりしています。

これには本当に驚き、感動しました。

近隣の小学生たちも、障がいのある子や外国人の子とフツーに接しています。一緒に遊ぶ雰囲気があれば自然と一緒に遊び、そうでなければ特に気を使いもしません。障がいや国籍とは関係なく、時には言葉さえも関係なく（日本語が通じなくても）、気が合えば仲良くなって楽しそうに過ごしています。遊びに飽きるとケンカもします。そんな時は別の遊びを促せば、「僕、トランプは得意だよ！」とすぐに機嫌が直ったり・・・。

子どもたちは最初から多文化共生なんだなあと思いました。

クローズドのパルとオープンのあおと、両方やってみて見えた子どもたちのありのままの姿でした。

よみかき宿題こどもカフェ＠なぎ

黒字経営からの脱却（？）を目指して

二〇一七年夏、私たちはこども食堂の新たな会場を探していました。

直接の動機は、あおとこども食堂が二階を借りているビルの一階部分の飲食店が廃業してしまい、オーナー会社の収益悪化が見込まれるため、私たちとの契約を打ち切るのではないかと恐れたことです。

月に一度、午後から夜八時まで、水や電気、備え付けの備品などを使い放題で賃料は一万円。しかも、オーナーは年間十万円を寄付してくれていました。

この時は結局、契約打ち切りとはなりませんでした。一年後の二〇一八年夏にやはり打ち切りを宣言され、秋までに別の会場を探すことになったのですが・・・。

二〇一七年に新たな会場を探し始めたのは、月に一度の開催を楽しみにしてくれている子どもたちのために、あおとこども食堂をなくすわけにいかない、という動機が一番でしたが、もう一つ、実は、レインボーリボンのこども食堂事業への寄付金が非常にたくさん集まるようになっていて、パルとあおと、月に二回開催だけではお金を使いきれない・・・という贅沢な悩みも生じていました。

前年度こども食堂事業にかかった経費が三十二万円強だったのに対して、寄付金は五十六万円以上。参加費の収益約十六万六千円と寄付金を足した収益の合計は七十三万円強。四十万円以上の「黒字」が出てしまったのです。

NPO 法人も次年度以降の活動費に充てる黒字が出ても問題はないのですが、実際、この黒字を消化する活動を作っていかなくては、寄付してくださる方に説明がつきません。

「誰でもいらっしゃい」とオープンに宣伝できるあおとこども食堂を始めたことで、寄付も集まりやすくなっていましたし、ホームページやフェイスブック経由で「ボランティアをしたい」と連絡してきてくださる方もとても多くなりました。

これも今考えると不思議なタイミングだったな～と思いますが、葛飾区の学校給食の調理員さんがあおとこども食堂に見学に来てくれたのです。葛飾区職員労働組合の副委員長でもあるＩさんを先頭に、地域貢献の活動をしたいと申し出てくださいました。新たなこども食堂オープンを画策していた私にとっては、願ってもない巡り合わせでした。

この頃は「子どもの貧困問題をなんとかしなければ日本の未来が危うい」という認識が国中に浸透してきていて、日本有数の大きな財団が、子どもの貧困問題に取り組む草の根の団体に二千万円の助成金を出すというビッグプロジェクトもありました。我々も

その二千万円の助成金ゲットを夢見て、「もう場所探しに右往左往しなくて済むように、一軒家を買っちゃうってどうかな？」と、売りに出ていた家の内覧にも行ってみました。結局、そのプロジェクトは県や市など行政がまず名乗りを上げなければ成り立たない内容であることが判明し、断念しましたが。

また、ちょうどこの頃、都心の大手企業が節税対策でこども食堂への寄付を検討しているという話も関係者の間で流れ、レインボーリボンにも「会って説明したい」という、実体がよく分からない会社の人から連絡が来ました。話をよく聞いてみると、キックバック（寄付金の一部をその人に戻す）を要求する内容で、要するにマネーロンダリングの片棒を担ぐような怪しい話でした。

こども食堂を支援しようという世間の追い風を感じながらも、こども食堂ブームを利用した詐欺まがいの話に騙されないように、そして、ブームが去って寄付金が集まらなくなるかもしれないという心配もやはりあり、通常のお店とは違って収益を上げられない事業を、どうしたら現実的に持続していけるのか、いろいろな人に助言をもらい、情報をもらい、最終的に行きついた新しい会場が、「地域活動支援センターなぎ」でした。

以前からお世話になっている障がい者支援施設のスタッフに紹介を受け、「なぎ」を運営しているＮＰＯ法人 SIEN の理事長、石川誓子さんに会いに行きました。

青砥駅からそれほど遠くもなく、住宅街のマンションの一階、元は蕎麦屋さんだったという居室には一枚板の大きなテーブルがあります。台所が狭い点は心配でしたが。

土曜日は使っていないということで、当面は月に一度、第一土曜日に貸していただくことにしました。

精神障がいのある人と共に

地域活動支援センターなぎは何の地域活動を支援しているのかというと、精神障がいのある人の地域活動です。

精神障がいは、いろいろな障がいの中でも特に世間の偏見、差別が強い障がいです。この年の一年前、二〇一六年七月、相模原市の知的障がい者施設「津久井やまゆり園」を襲った植松聖被告が精神疾患措置入院の経験があったということも、「精神は怖い」という偏見を助長しました。（専門家によれば植松被告は精神障がいではないそうですが。）

そんな偏見・差別がはびこる地域社会で、例えば「うつ病」とか「統合失調症」といった脳の病気が治った後、他の病気、例えば心臓疾患が治った人や、骨折が治った人などと同じように、障がいが残っている人が「退院できてよかったね」と温かく受け容れられるかといったら、それはとても難しいということは想像に難くないですよね。

区の委託を受けて地域活動支援センターなぎを運営しているNPO法人SIENの石川誓子理事長は、だからこそ、障がいのある人が地域の役に立つボランティア活動に取り組める環境を作りたいと願っていました。センターの利用者がボランティア活動をする場として、こども食堂はピッタリなのではないかと。

私はといえば、新たな世界が開けそうな予感にワクワクでした。

障がいについて、なんだかんだ言ってレインボーリボンは今までもけっこう学習してきています。区の教育委員会生涯学習課という強い味方もいることだし、今回もさっそく学習会を企画しました。

そもそも、メンタル・ヘルスは私たちの身近な問題です。心が疲れてしまって、病気になった時も、適切な医療や支援を受けられることは誰にとっても大切です。

それに、多文化共生の子育ち・子育て環境を作ることをミッションとする我々レインボーリボンにとって、地域で当事者と共に生きる温かなコミュニティを作ること、思いやり・支え合いの人間関係を作ることは、まさにミッションに沿った活動となります。これから「なぎ」で共にボランティア活動を担ってくださる障がいのある皆さんとの相互理解の場として、石川理事長を講師に、センター利用者にも直接お話を聞かせていただく場を十一月に設定し、十二月には「なぎ」を会場にこども食堂をオープンさせる計画が始動しました。

初めて大きな助成金を得る

あおとこども食堂の場所はとりあえず継続できそうだという状況になり、「なぎ」はまったく新しい、レインボーリボンにとっては三つめのこども食堂にしようという方向でした。その時、まるで神様の啓示のように目の前に現れたのが「東京子育て応援事業」助成金でした。

前述のように、二千万円助成金の夢が破れ、二百万円の怪しい寄付の申し出に翻弄され、おカネの話に疲れ果てていた私は、公益財団法人東京都福祉保健財団から郵送されてきていた「東京子育て応援事業」案内チラシをしばらく机の上に放置していました。

そういえば助成金説明会の案内が何か来てたな・・・と、チラシを見直したのは、なぎの新事業にワクワクし始め、前進する気力が湧いてきた時です。

理事の仲間と説明会に出席し、先輩活動家に相談し、理事会で話し合い、助成金申請を決めました。

この年の九月、私の生活は「寝ても覚めても助成金」と言っても大げさでないほど、申請書作りに捧げた一ヵ月でした。なにしろ、前年度のすべての事業費実績が百五十万

円ちょっとだったレインボーリボンが、三百万円のこども食堂新設事業計画を立て、二百万円の助成金を申請したのです。

なぜ助成金が欲しいのか、助成金を得たら社会全体にどんな良い影響を与えることができるのか、助成期間が終わる翌々年度からどう事業を継続するのか・・・、考えれば考えるほど、やはり月に一回のこども食堂では論理が成り立たない気がしました。

助成金申請が通らなければ月に一回開催で精一杯ですが、もしも通ったら、「毎週開催」のこども食堂を目指すことにしました。これが後々、大変なことになったのですが・・・。

なぎで新しく始めるこども食堂は「よみかき宿題こどもカフェ＠なぎ」と名付けることにしました。元お蕎麦屋さんの一枚板のテーブルを囲んで、日本語の読み書きを学びたい外国人の子どもや家庭に学習環境が整えられていない子どもたちと、学習支援をしてくれる若者、それに障がいのある人も楽しくコミュニケーションがとれる「カフェ」を目指そうと。

あおとこども食堂の継続が確かになった時点で、なぎは誰でも参加できるオープンな地域交流の場ではなく、困難を抱えた子どもを支援するクローズドの場にしようと決めました。

私の頭の中にあったのは、パルこども食堂に参加している寺子屋の子どもたちよりも、もっと困難な状況下にいる子どもたちです。

寺子屋に来ている子どもたちは、保護者が子どもの学習環境に関心を払い、寺子屋に申し込むという行動をとってくれています。しかし、そんな親の行動に支えられていない子もいます。誰かが支援しないと低学力の底なし沼に足をとられそうな子どもを何とか救い上げたいと、その時の私は考えていました。

例えば、親がダブルワーク、トリプルワークで土日も子どもと一緒に過ごせないような家庭の子どもに、大学生ボランティアが学習支援をすることで、学力の面で自信をつけてもらうと共に、大学生のお兄さんお姉さんがロールモデルとなって、自分の将来像を描く希望も見つけてもらえるのではないかなと。

やはり、パルで見てきた寺子屋がモデルです。寺子屋で学習支援をしている大学生たちは、ただ勉強を教えているというだけではなくて、中学生たちの良き相談相手、良き伴走者となっていました。小さい頃からいろいろなことを諦めたり、我慢してきた子どもたちは「どうせ自分なんて」という気持ちになりがちですが、そんな子どもたちを励まし、自らの振る舞いによって「こういう未来もあるんだよ」と体現して見せてくれる、まさに中学生にとっては希望の星なのではないかな、と思います。

なぎでもそんな大学生ボランティアを確保することができれば、毎週土曜日開催となって、パルやあおとこども食堂と重なってしまっても、なぎには大学生がいるから大丈夫、という状況が作れると思ったのです。

また、経済的なストレスにさらされている親が往々にして精神的に傷ついている姿も見てきました。子どもへの愛情がないわけではないのですが、適切なケアができない自分がいて、さらに自分を責めてしまう親もいます。そんな親御さんを説得して「こどもカフェ」で支援を受けることができるようになれば、親も精神的な安らぎを得て、支援者に心を開き、親自身に必要な支援を求める行動にもつなげられるのではないかなとも思いました。

外国人の親子への支援も、もちろんレインボーリボンの原点ですから外せません。

こども食堂のブームが起きる以前から子どもの貧困問題に取り組む民間の活動は、主に「学習支援」という形をとり、家庭の収入などで線引きをした対象者に直接的な支援を届けてきました。

レインボーリボンは「パルこども食堂」で、そうした先輩ＮＰＯの学習支援の場にさらにこども食堂という「居場所支援」を載せることで、子どもたちがどんなに生き生きと自分を表現できるようになるかを目の当たりにしました。

初対面の相手とは絶対に目を合わせなかった女の子が、やがて、見学に来た大人に「お茶どうぞ」と積極的に気を配るようになったり、ＳＮＳの世界で真っ黒な背景に白抜きの字で「死にたい」と書き込んでいた中学生が、学校が終わると急いでやってきて、大きな声で「何を手伝えばいいですか？」と言ってくれるのです。

親にとっても「居場所」が本当に必要なんだと思います。こども食堂は、例えば夫の暴力から逃れて命からがらこの地に引っ越してきて、やっとの思いで日々の生活を送っているお母さんが、子育ての悩みをボランティアの我々に打ち明けることができたり、「安く食料を買えるところを教えてください」と言えるような、そんな「いのちの居場所」です。

ただ、「パルこども食堂」は学習支援の対象となっている子どもを中心に、「支援が必要な子どもに支援を届けられる」メリットがある一方、やはり「クローズド」であるため、地域の人に広く認知してもらうことは難しい運営方法でした。そこで、「あおとこども食堂」は誰でも入れるオープンなイベント型のこども食堂にしました。その結果、遠い所からの見学やボランティアの申し出、食品の寄贈も驚くほどたくさん寄せられるようになりました。

パルで学習支援と居場所の合体による大きな効果を経験し、あおとで世間の支持を得ることができたレインボーリボンならではの新規事業として、「よみかき宿題こどもカフェ＠なぎ」を立ち上げたいと思いました。

なぎは少人数の登録制とし、支援が必要な子どもたちが安心して来られるクローズドの空間とするけれど、なぎの子どもはオープンなあおとと行き来ができ、また、小学生が中学生になり、高校受験のための本格的な学習支援を必要とするときにはパルにつながる寺子屋に紹介することもできるのではないか・・・。三つのこども食堂がうまく連動するのではないかと、「東京子育て応援事業」助成金の申請書を書きながら、夢はどんどん膨らみました。

この事業が成功事例となれば、こども食堂の多様なあり方が世間に認められ、こども食堂が一時のブームに終わらない、地域に必要な社会資本（ソーシャル・キャピタル）として認められるのではないか・・・。

私のほとんど「妄想」とも言える企画が審査員にどう評価されたのか、詳しくは分かりませんが、とにもかくにも、待ちに待った「貴法人の提案事業が助成対象事業として選定されました」という結果通知が、十月三十一日、ついに届きました。

突っ走って、石につまづく

さあ、大忙しです。

大型冷蔵庫、二十人分の食器、炊飯器の注文。近隣小中学校、民生委員さんへの挨拶、チラシの作成と配布。十一月中旬の試食会、十二月第一土曜日の第一回開催に向けて走り出しました。

その時です。走り出したとたんに大きな石につまづいたことに気がつきました。

最初に「なぎ」の石川理事長とお会いしたとき、私たちのスタンスは「あおとこども食堂を継続したい」ということだったのです。月に一回の、地域に開かれたオープンスペースというイメージでした。ところが、途中であおとこども食堂の場所はこのまま借りられそうだということになり、助成金申請を決意したところで、「週に一回、困難を抱えた子どもの登録制」と大きく方向を転換していました。

調理を担当してくださる学校給食調理員チームのＩさん、地域の子どもたちに周知してくださる民生委員さんなど、丁寧に説明してきたつもりでした。ところが、一番肝心の石川理事長には事業計画書を渡しただけで、落ち着いて話し合う機会はついに一度も作らずにここまで来てしまっていました。

最も問題だったのは、「毎週開催」という点でした。

精神障がいのある「なぎ」利用者は、かつて病気を発症した時の辛い思い出や、家族や周囲の冷たい仕打ちにあった傷つき体験など、私たちには想像もつかない苦しみを背

負って生きています。身の周りのちょっとした変化にも敏感に反応するそうです。我々が搬入した大きな冷蔵庫にも、「冷蔵庫が変わった！」と、大きな反応があったそうです。

今まで地域の人との交流がほとんどなかったセンターで、いきなり見知らぬ人たちが毎週入って来るという環境の変化に、なぎ利用者は耐えられないだろうというのです。

しかも、「こども食堂」というと、とても元気な、勢いのあるイメージがあります。障がいのある利用者が、やっと見つけた大切な地域の居場所が、元気な子どもたちに取られてしまうのではないか、と脅威に感じるのも無理はありません。

石川理事長も「障がいのある方のボランティア活動として、こども食堂とコラボしたい」というご自身の思いが先行してしまって、利用者の声を丁寧に聞いてこなかったと後悔されていました。

またやってしまった・・・。私の大失敗。熱い思いだけで突っ走ってしまって、最も大切な配慮、ケアがまったく出来ていなかったのです。助成金審査に通って「やったー！」と天にも昇る気持ちだったところから、ガックリと地に落ちるような感覚でした。

「毎週開催」という事業計画で通った助成金なので、毎週開催できなければ返上するしかないと思いました。でも、もう冷蔵庫、買っちゃったし、どうしよう・・・。

なぎスタッフの皆さんと話し合い、利用者の皆さんと話し合い、遅ればせながら我々の事業計画を説明し、利用者の皆さんにもボランティア参加していただきたいとお願いし、「当面は月に一回開催で様子を見ます。でも、やはり将来的には毎週やりたいと思っています」という立場を、なんとかご理解いただきました。

もともとの事業計画でも年度内の三月までは月に一回の開催、次年度の四月から毎週開催という予定でした。私としては三月までの四か月間で、なんとか利用者の皆さんを説得したいという思いでした。

その後、年明けの一月、東京都福祉保健財団の事務局による助成対象事業の中間ヒアリングがあり、私は困り顔で「実は・・・」と切り出しました。四月からの毎週開催がもしも実現しなかったら、助成金は返上しなければならないでしょうか。それとも、四週に一回開催だから、四分の一に減額でしょうか・・・。

事務局の方は「利用者さんの気持ちがそういうことなら、仕方ないでしょう」と理解してくださって、さらに「福祉施設に入っていくのは大変なんですよ。施設長のご理解があってのことですから、これからも良い関係づくりに努力してください」とアドバイスしてくださいました。

なるほど・・・。私の感覚としては、利用者さんの気持ち、石川理事長のストップが、私にとって邪魔なもののような気がしていましたが、利用者がいる福祉施設でこども食

堂を開催するというところにこの事業の斬新さがあったわけで、初めからスンナリといかないのも当然と言えば当然。財団に助成するに値する事業だと評価していただいた「斬新さ」の部分で努力しなさい、というのは的確なご指導でした。

私のモチベーション、地に落ちたところから、再びムクッと上向きました。

「困難を抱えた子ども」は手強い

なぎを開設するための最大の課題は、「困難を抱えた子ども」に登録してもらうことです。
まずは、学校に、校長先生に会いに行きました。

「青少年委員」という東京都独自の非常勤公務員の制度があり、葛飾区でも小中学校校区ごとに一人、主にＰＴＡ役員のＯＢなどが任命されています。私も二〇一六年から地元の中学校区選出の青少年委員を務めていて、学校に行く機会には恵まれていました。
小学校のクラスに何度か入り、三十数人の子どもたちと顔なじみになったこともありますが、そうすると、相対的貧困の状態にある子どもは六～七人に一人、クラスに五人くらい、発達障がいの子どもは十五人に一人、クラスに二人くらい、という数字が、本当に現実味を帯びて見えてきます。小学生の年齢ではまだ「性自認」に個人差が大きいため、性的マイノリティーが十九人に一人という実感は見えませんでしたが。
ボロボロの文房具しか持っていない子とか、能力の発達がアンバランスなせいで集団行動についていけない子など、こども食堂に来てほしいなと思う子が具体的にいました。
実際、あおとこども食堂のチラシを全クラスに配布させていただき、その運営責任者の欄に私の名前を見つけた子が、私の目の前で参加申込欄に自分の名前を書き込んでくれたこともあります。でも、その子はついに一度も来ることはありませんでした。理由はいろいろと想像するばかりですが、やはり、運営者である私がその子のおうちまで行って、保護者に直接お会いして、「支援をしたい」というような大それたことは言えませんが、お子さんにとって楽しい居場所がここにあるんですよと説明したいな～と、強く思いました。
そこで、「こどもカフェ＠なぎ」のチラシは、レインボーリボン宛ての「説明申込書」と返信用封筒と一緒に配ることにしました。
チラシには十二月から三月まで、月に一回開催、四月以降は毎週開催を目指しています、学習支援をします、学校給食のベテラン調理員さんがカフェ風のご飯を作ってくれます、すべて無料です、と書き、土曜日に子ども一人でご飯を食べさせてしまっているとか、宿題の面倒を見てあげられていないとか、外国から来たので日本語で勉強をみて

ほしいという保護者の皆さん、詳しい説明に伺いますので「説明申込書」を返信用封筒で送ってください、というわけです。

予想はしていましたが、どの学校も校長先生は渋い顔です。
チラシと説明申込書を「気になる家庭の保護者に渡してほしい」と言われても、学校が保護者を選んで渡せるはずがありません。渡された保護者が「なぜ、うちに？」と言ったら、説明のしようがないですもの。「お宅が貧困だからです」、「お子さんに障がいがあるからです」、とてもそんなことは言えません。
それはよく分かっていました。だから、例えば保健室登校の子どもに、保健室の養護の先生がそっと渡してほしい・・・と、渋る校長、副校長先生に、強引に何セットかずつ置いて帰ってきたという学校巡りでした。
後に、この学校巡りとは別のルートで、養護の先生を通して「なぎ」に登録してくれた子はいましたが、学校からの紹介で来た子は、今のところゼロです。

次に協力依頼に行ったのは区の総合教育センター。スクールソーシャルワーカー（ＳＳＷ）に「困難を抱えた子ども」の紹介を依頼しました。
ＳＳＷとは、学校での困りごとを抱えている子どもと家族を支えるための福祉の専門職で、もともとは一九九〇年代初め、アメリカで貧困などにより学校へ通うことができない子どもたちを支援する活動として生まれたそうです。日本でも子どもの貧困対策法に基づく大綱で、「『学校』をプラットフォームとした総合的な子供の貧困対策の展開」として、ＳＳＷの配置と活用が明記されています。
少ない人数でたくさんの支援要請に応えているＳＳＷの皆さんは、いつも本当に大変そうですが、たぶんご自身のプライベートの時間を削りに削って、我々ボランティアとの協働に取り組んでくださっています。
すでにパルこども食堂に長期不登校の子を連れて来てくれていたし、私にとっては頼もしい、ありがたい専門家でした。
この後、なぎにも、何人かの子どもがＳＳＷに連れられて来てくれることになります。

果たして、十二月二日の初回開催に来てくれたのは、子ども五人、保護者三人、ボランティア十七人の合計二十五人。その後も人数構成はだいたいこんな感じで、ボランティアの比率が非常に多い居場所事業となりました。
うちわの会議では「ボランティアの数が多すぎるよ～」と、いつも問題になるのですが、実際、調理スタッフ、学習支援ボランティア、我々運営スタッフ、それに「なぎ」利用者さんのボランティア参加と、一人ひとり必要な存在で、削ることができないのです。

子どもはというと、二月の第三回開催日に一人しか来てくれなくて肝を冷やしましたが、それ以外は三人から六人。顔ぶれは頻繁に変わります。
半年ほどで登録者自体は十人を超えましたが、安定的に毎回参加してくれる子は、第三回に来てくれた子、一人だけです。「困難を抱えた子ども」と、こちらが限定しているのですから、ある程度覚悟はしていましたが、それにしても、パル、あおととは全く違う展開に頭を抱えているというのが、正直なところです。

ある子は保護者の強い希望で、学習支援を受けるために登録しましたが、勉強をしたくないという気持ちと、知らない大人がたくさんいる場所に馴染めないということもあるのでしょう、なかなか来たがらないようです。
また、ある子はこども食堂が大好きで、パルもあおともなぎも、来ればいつも大満足の笑顔で帰っていくのですが、来るまでがなかなか大変です。お腹が痛い、頭が痛い、眠い、寒い、暑い・・・。
長期不登校でほとんど引きこもり状態の子どもは、昼夜逆転していることが多く、なぎの学習支援が始まる午後三時前にスタッフが玄関まで迎えに行っても、寝ていて出てこないという場合もあります。
なかなか手強いです・・・。

ボランティアの層は厚いが・・・

ただ、この状態の打開策は何かと言ったら、ほぼ答えは出ています。
一つは学習支援ボランティアの確保、もう一つは開催頻度を多くすることです。お手本としているＮＰＯ法人 Learning for All の寺子屋のように、週に何度か、普通の学習塾のように安定的に開かれている場があり、そこに行けば心から自分を歓迎してくれる素敵な大学生の「先生」がいる・・・そんな居場所を作ることです。

実際、長期不登校で人とのコミュニケーションが苦手な子でも、大学生ボランティアに対しては自分から心を開いて、いろいろなことを話しかけるというケースも見ています。本当に不思議なほど、我々おばさん世代とはほとんど喋らないのに、大学生のお姉さんが来ると、アニメの話、ゲームの話、家族の話、どんどん話が弾んでいる様子なのです。
「〇〇ちゃんは若い子じゃないとダメなのよね～」なんて冗談を言っていますが、やはり子どもの年齢に近ければ近いほど、きっと子どもの気持ちに寄り添えるオーラを出しているのでしょうね。

なぎは大学生など、学習支援ボランティアの確保が急務でした。そこで、以前からパルやあおとに来てくれていた大学生を頼りに、都心の大学のボランティアセンターに登録させてもらったり、大学のボランティアフェスタに出展させてもらったり、今現在も努力中です。

そうこうしているうちに、レインボーリボンの理事の息子も、私の娘も、晴れて大学生になりました。ここが地元のＮＰＯの強みで、我が子の同級生が今や大学生世代。ママ友ネットワークを駆使してボランティアに引っ張ってきています。

わずかばかりの交通費だけで、大学生たちは本当によくやってくれています。

子どもの出席確保と学生ボランティアの募集に苦心している一方、その他のボランティアの確保にはあまり苦労していません。

まず、調理ボランティアは何度も書いたように、葛飾区の学校給食の職員さん、しかも幹部クラスの方々がしっかりと担当してくださっています。

地元の民生委員さんや青少年委員の仲間もほぼ毎回、手伝いに来てくれます。

そして、何よりも「こどもカフェ＠なぎ」オープンの最大の目玉だった、なぎ利用者さんによるボランティア参加が、かなり良い雰囲気で実現できているのです。

利用者ボランティアの方々は、学習タイムが終わる頃にいらっしゃいます。そこで私が「は～い、そろそろ学習タイム終了ですよ～」と声をかけ、あの大きな一枚板のテーブルに子ども、学生、利用者さんは座ってもらい、我々スタッフや保護者はその後ろに立って、ぐるっと一つの輪を作ります。私、お得意のコミュニケーション・ゲームです。今日の参加者の名前を、誰かが誰かの名前を最低一回は呼ぶというゲームをやります。

それから手を洗って、子どもたちが配膳を手伝い、食事タイムです。食事タイムには調理ボランティアの管理栄養士さんにメニューの解説などもしていただきます。

食事が終わると、トランプやかるたの「和みタイム」です。この和みタイムが、利用者さんたちの活躍の場となっています。活躍と言っても、普通に子どもたちと遊ぶだけですが。

クローズドの場なので、レインボーリボンのホームページやフェイスブックにブログを掲載する時は参加者の顔を隠しますが、隠していない写真データを石川理事長たち、なぎのスタッフの皆さんに見せると、とても驚かれました。利用者のこんな弾けるような笑顔は見たことがないというのです。

子どもたちもとても楽しそうです。私は自分の子ども時代、お正月などに親戚が集まって賑やかに過ごした光景を思い出します。

このように学習支援ボランティア、調理ボランティア、利用者ボランティアなど、支援者の層が充実している贅沢な状況で、あとは我々、運営サイドのもうひと頑張りというところでしょうか。

利用者さんの「毎週開催」への抵抗感は徐々に薄れていると思うのですが、今は我々の側の事情で、まだパルやあおとと重なる土曜日になぎを開催できる体制にはなっていません。運営責任者が確保できないのです。

運営の責任とは、参加者の安全を確保する責任です。食の安全はもちろん、事故や災害が起きたときの対応にあたること。ハラスメントなど、言葉や態度による「暴力」が起きないように、心の安全にも気をつけること。

助成金の申請書を書いていた段階では、LFA の寺子屋のように、学習支援ボランティアが毎回の運営にも責任を持つ体制を構築できると思っていました。が、実際にやってみると、やはり学習支援と運営責任の両立はとても難しいと感じました。

特になぎは保護者の参加も受け入れているので、大学生に保護者世代の安全責任を負わせるのは酷というものでしょう。

レインボーリボンは今後、運営スタッフの人材確保が課題となってきそうです。

終わりに

一回一回のこども食堂は本当にいつも楽しくて、嬉しくて、感動して、終わったら達成感で幸せいっぱいなのですが、こうして文章にしてレインボーリボンのこども食堂という事業全体を俯瞰しようとしてみると、なんと不完全な、なんと未熟な、欠点ばかりが目立つ現在進行形の情けない姿が見えてしまって、正直とても辛かったです。

シロウトのママたちが無謀にも飛び込んだ「こども食堂」というワンダーランド。
シロウトだからこそ、ヘンなプライドもなく、多方面の方々に「助けて」「教えて」と無邪気に頼っていけたネットワークの広がり。良い面も悪い面もすべて、全国どこにでもいる、地域で暮らし、地域の子どもたちの傍にいる普通のおばさん、おじさんが始めた活動の等身大の姿です。

普通のおばさんにも何かできることがあるはず、と思って、こども食堂を始めたからこそ、やっぱりシロウトにはできないということにも直面しました。
本当にお腹を空かせている子どもの生活を改善するためには、やはり行政に介入してもらわなければなりませんでした。でも、もし、こども食堂をやっていなかったら、お腹を空かせている子どもの存在に気づくこともなかっただろうな、と思います。その存在に気づかなかったら、学校の先生や医療の専門家、行政の子ども支援窓口など、とにかく助けてくれる人を必死に探すこともなかったでしょう。どこかで悲惨な事件が起きたとテレビで見て、政治も行政も何をやっているんだ、ダメだな～、と批判するだけだったと思います。
こども食堂ってすごいな、自分で SOS を出せない子どもを、専門家や行政の窓口につなぐプラットフォームの役割を、こんな私でも担えるようになってきているんだなと、またもや自画自賛です。

ここでは詳しく触れませんでしたが、食品衛生面での危機管理など、実は運営者は毎回、それこそ胃が痛くなるほどの緊張感をもってあたっています。それでも事故は起きる時は起きる・・・。これからどんな大事件、災難が襲ってくるかわかりません。
今は「こども食堂」と言えば、世間は好意的な温かい目で見てくれていますが、いつ好意が敵意にひっくり返るか、バッシングを受ける日が来るか、怖れを抱きながらも、そうなっても負けない、折れない心を準備しなければと思っています。
そうなった時に折れないために、今は実現できていないけれど、いつか実現したい夢を語って、「これを目指しているんだ」「私たちのミッションはここにあるんだ」と、いつも確認しながら進みたいと思います。

終わり